

## 現代華人社会における生死への思い

—第1回国際華人死生学カンファレンス—

篠崎香織

2005年4月23～27日にかけて、表題のカンファレンス(第1届国際華人生死学検討会: 当代華人世界的生死關懷/The 1<sup>st</sup> International Conference of Chinese Thanatological studies: The Chinese Thanatological Concern in Contemporary Society)がスランゴール州スバンジャヤのサンウェイ・ラグーン・リゾートホテルで開かれた。このカンファレンスの主催団体を全て挙げると、マレーシアの孝恩グループ(Xiao En Group)、ルクセンブルグ・ヨーロッパ・アジア人文社会科学研究所(Europe-Asia Institute of Humanity and Social Science, Luxemburg: EAI)、ロンドン生涯教育学院(London Academy of Continual Education: Lace)、台湾生死学学会、台湾葬儀学学会、マレーシア葬儀文化学会、台湾死別ケア学会など多数であるが、実質的な主催団体は孝恩グループであった。

ニライ・メモリアルパーク(孝恩園)という霊園の経営を事業の中心に据える孝恩グループは、LaceとEAIと提携し、アジア地域の華人を対象に学位取得プログラムを運営するなど文化・教育事業も手がけている。孝恩文化基金の最高経営責任者で、EAI-孝恩文化基金アジア地域合同キャンパス・プログラムの主任であるオン・センホアット(Ong Seng Huat: 王琛發)博士は、欧米では中学校で死生学について学び、日本でも死

生学研究が盛んになりつつあるが、華人学術界では死生学に対する認識や関心はまだ薄いと言う。また、死生学は人の生死に関わる全ての事象を扱うために学際的な視点が必要であるのに、華人による死生学研究は葬儀文化の研究がほとんどであると指摘する。オン博士は、生と死に関する学際的研究を華人学術界に根付かせるため、今回のカンファレンスを企画したと語る。

最初の2日間で研究報告が行われ、5つのセッションが組まれた。各セッションは報告者3人とディスカッサント1人によって構成された。15人の報告者の背景は非常に多様で、生と死に関わる華人の哲学や文化を直接研究テーマとしている研究者のほかに、華人の宗教や美術、歴史を研究する中で生と死に関わるテーマを取り上げたことのある研究者、教会関係者、イスラム研究者、公営・民営の葬儀場や霊園の経営者やそれらの設計・建築を手がける建築士などが、中国、台湾、シンガポール、マレーシア、オーストラリアなどから参加した。日本からの参加者はいずれもJAMS会員で、ディスカッサントとして舛谷鋭会員が、報告者として筆者が参加した。

マレーシアに関わる報告には、以下の4報告があった。マレーシア愛国実行委員会委員長のKok Ren De(郭仁徳)氏は、日本占領期に抗日戦で殉死した華人が今日のマレーシアでは正当に評価されていないと指摘し、殉死者の功績を

称え、歴史を忘れないよう平和記念公園や平和記念館の設立を計画していると述べ、計画への寄付を呼びかけた。これに対して中国の研究者が「たいへん感動した」として、その場で100米ドルを寄付する一幕もあった。オン博士は、中国からマラヤに単身で移住した人びとは異姓同郷会館を通じて擬似的な血縁関係を構築し、葬儀など宗教儀礼を執り行う事例が多かったことを指摘し、マラヤの同郷会館には大陸や台湾のそれとは異なる独自の発展が見られることを示した。ニライ・メモリアルパークには中国的寺院が建てられているが、その設計・建築を担当したのはオーストラリア人の Will Marcus 氏(Argo Projects Pty Ltd)であった。氏は、中国の孝恩寺の建築構造を実地調査し、それをマレーシアの自然環境の中で復元した経験を語った。筆者は、20世紀初頭の海峡植民地の華人が辮髪(べんぱつ)の維持を強く主張したことを、多民族社会の中で自らの文化・宗教に見合う方法で死を受け入れたいという欲求と関わっていたことを報告した。

3日目と4日目は実地視察が催された。25日はクアラルンプール市クポン地区の華人墓地を見学し、26日はマラッカを訪れ、華人墓地として長い歴史を持つブキッ・チナ(三寶山)など、華人とかかわりの深い歴史的名所を見学した。オン博士によれば、実地視察を行うことで研究者が認識を新たにし、それらを反映したよりよい最終報告書が寄せられることを期待して、自らが企画する学会には必ず実地視察を組み込むとのことであった。

5日目には総括会議が行われた。ここでは、孝恩グループがメモリアルホール建設計画を紹介し、研究者に意見を求める場面があった。特に台湾の研究者たちが自らの経験に即して具体的な提案を活発に行っていたのが印象的であった。その後、国際華人死生学会の設立が提案された。台湾と中国の研究者が政治的な影響を受けずに参加できる場所でもあるとして、マレーシアの孝恩グループが実質的な運営を行うことで合意した。だが、マレーシアでは「国際学会」の登録が困難であるという事情があるらしく、学会登録はオーストラリアで行うことになった。このことがオーストラリア政府に対して助成を申請しようという提案につながり、学会をアピールするために第2回会議をメルボルンで開催することが決定された。第1回会議は、各国の華人の研究者を集めたという意味で「国際的」であったが、使用言語はほぼ華語のみで、華語を解さない人が議論に参加する余地はほとんどなかった。華人について研究しているが華語を主要学術言語としない研究者を広く引き付け、諸方面から助成・協力を得るべく学会の活動内容を理解してもらうため、研究内容を英語で説明し発信する必要があることが指摘された。

国際華人死生学会が、多くの研究者を引き付けてさらなる発展を遂げるよう願う。